

2023年 新年の干支「癸卯（みずのとう・きぼう）」に思う 寒気が緩み、萌芽を促す年！！

業界を挙げて新たな価値を創出する変革（イノベーション）の年に！

株式会社 山西 あすなる会顧問
代表取締役社長 西垣 洋一

新年を迎え謹んで新春のお慶びを申し上げます。

旧年中はあすなる会の皆様には、格別のご高配を賜り厚く御礼を申し上げます。

2023年の干支は、「癸卯（みずのとう・きぼう）」になります。「癸」は静かで温かい大地を潤す恵みの水を表し、十干の最後にあたるため、生命の終わり新たな生命の成長という意味を持つと共に「揆（はかる）」につながる文字で、植物の内部にできた種子が測れるほど大きくなり、春の間近にして萌え出さず用意をしている様を意味しています。「卯」は十二支の語源としては「茂（ほう、しげるの意）」または「冒（ほう、おおうの意）」で、草木が茂り地面を蔽うようになった状態を表しており、春の訪れを意味します。これらを合わせて考えると、2023年の干支、「癸卯」は、「寒気が緩み、萌芽を促す年」、つまりこれまで準備し、育ててきたことが十分に実り、芽吹き始める年であり、勢いをもって大きく飛躍する年だとされています。

長期化するコロナ禍、ロシアによるウクライナ侵攻などを起因とする歴史的な円安、供給制約などのインフレ圧力による物価高上昇など今までの常識、秩序が覆るような出来事が起こり、あらゆる業界で不確実性は高まっています。こうした状況下、我々木材 住宅業界においても、新設住宅着工数の減少が避けられない中で、既存の枠組みを打破し、新たな価値を創出する変革（イノベーション）の必要性が求められています。只、イノベーションと言ってもゼロから新しいものを生み出すということではなく、本来の意味でのイノベーションとは既存の商品・サービスそして事業を複合的に掛け合わせることで新たな価値を創造することだと私は思います。そのためにも皆様1人1人が自社の問題・課題を見つめ直し、生産性の向上を図ると共に、“独自性”を持って新たな需要を生み出す新市場（商品等）、新分野への展開を図ることが喫緊の課題となります。

現在、ウッドショックの余波が残る中、今後、業界が木材の安定供給体制を構築する上では、循環型社会の形成が欠かせません。今まさに木材 住宅業界は新たな“転換点”に差し掛かっており、川上から川下全ての業界が一体となり、持続可能な価値を伴ったサプライチェーンの構築に取り組んでいかなければなりません。

又、循環型社会・脱炭素社会を迎えるにあたり、日本は2050年カーボンニュートラルの実現、2030年迄に温室効果ガスを2013年比で46%削減することを国際公約としています。こうした環境問題への危機感がますます高まる中、建築物（中大規模建築物等）の木造化・木質化への更なる推進、環境負荷低減に沿う省エネ性能の一層の向上といった環境と経済の好循環を目指す動きが加速していくものと思われます。そのためにも環境保全と経済成長の両立を目指したGX（グリーントランスフォーメーション）への取り組みとデジタル技術を駆使し生産性の向上を促すDX（デジタルトランスフォーメーション）の更なる推進がこれからの経営の重要なテーマとなります。

当社としましても、“快適な住まいづくりのパートナー”の理念の元、皆様の受注支援、更なる家づくりのサポート体制を図って参ります。次ページに現在推進しているワンストップサービスサポートシステムとしての当社の取り組みを記載しております。ぜひご活用頂きますと共に、今後も新たな支援サポートを立ち上げ皆様のお役立ちを図って参ります。本年も厳しい経済環境が予想されますが、当社はこれからも、新たな需要と顧客の創造に向け、お役立ちを図り、皆様のファースト・コール・カンパニーとして、共に歩んで参る所存です。本年も変わらぬ御愛顧の程宜しくお願い致します。最後になりますが、皆様のご健康と本年の干支「癸卯」のように業界を挙げた飛躍の年となれるよう祈念申し上げ新年の御挨拶とさせていただきます。

2023年1月吉日

◆干支の智慧 - 癸卯（みずのとう・きぼう） -

「本年の干支は、「癸卯」になります。陰陽五行では「癸」は陰の水で、十二支の「卯」は陰の木となり、水生土の相生という状態になります。相生とは相互助長のことで、木は水に養われ水がないと枯れるため、バランスを保つことで吉の状態になるとされています。物事の終わり始まりを意味する「癸（みずのと）」。安全や温和、また跳ね上がるという意味のある「卯（う）」。これを組み合わせると「癸卯」の年は、これまでの努力が実を結び、勢いよく成長し飛躍するような年になるといわれています。まだまだ油断はできませんが、コロナ禍も一定の収束が見えてきました。しかし、世の中は景気後退や政治に対する不安に直面しています。兎のように、普段は落ち着いたように見えても、動くときは俊敏に目的に向かって進むという状況の見極めや判断力をもって物事に当たりたいものです。」



◆干支の格言（“卯（兎）”にちなんだ諺・経営語録）

・「獅子は兎を撃つに全力を用う」

実力のあるものは小さなことにも手を抜かず何事にも全力で向かうという意。

・「狡兎三窟」

すばしい兎は三つの隠れ穴で危険から身を守るという意味で、身の安全を保つために、いくつかの避難場所や策を用意するたとえ。

・「兎を見て犬を放つ」

兎を見つけてから、犬を放ってもまだ遅くない。手遅れだと思ってもあきらめないこと。いったんは失敗したようでも、ことを見極めてから対策をたてても取り返しができるたとえ。

・「兎の角亀の毛」

角のある兎はいないし、毛の生えている亀もないことからありえないことのとえとして用いる。

・「兎の股引き」

何をしても、途中で放り出して、後の続かない者をいう。兎が股引をはいたら、じきにぼろぼろにちぎれてしまうに違いないということ。

・「卯の登り坂」

兎は前足が短くて坂を登るのが巧みであることから、地の利を得て物事がよい条件に恵まれ早く進み、得意の力を発揮することのたとえ。

・「兎の子の生まれっ放し」

兎が子を産んでも産みっぱなしで何の世話もしないのと同様に、自分のしたことの後始末をせず、やりっぱなしにすること。無責任なことのたとえ。